様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９５３

研究課題名（和文）地域資源マネジメント手法としての「資源一斉公開プログラム」の有用性と可能性

研究課題名（英文）Usefulness and Possibility of the "Open City Program " as a Method for Local Resource Management

研究代表者
岡村　祐（Okamura, Yu）

首都大学東京・都市環境科学研究科・准教授

研究者番号：６０５３５４３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、建築、庭、工場、歴史遺産等の特定の地域資源を期間限定で一斉公開する「オープンシティ・プログラム」に注目し、国内外での実施状況（目的／資源／規模／体制）の把握や、事例調査を踏まえて企画運営のための方法論を構築した。そして、この「オープンシティ・プログラム」には、ストックマネジメント、コミュニティ形成、地域ブランディング、地域連携の視点が内在し、都市の公共性、社会性、包摂性、柔軟性の回復・再生というニーズに応じた近年のまちづくりの潮流のなかで、実験的、仮設的、広告宣伝的な役割を果たし、都市の将来ビジョン実現に向けた第一歩として活用し得ることを論じた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the "Open City Program", where particular local resources such as architecture, garden, factory or heritage are simultaneously open to the general public during limited days. As a result of the survey, it could grasp the whole context with regard to the purpose, resource, scale and organisation as well as develop a method for planning and management of this program. Additionally, it discusses the "Open City Program" could play a experimental, temporal and promotional role and become the first step to realise the future vision, in which town planning is currently trying to restore publicness, sociality, inclusiveness and flexibility in urban space.

研究分野：都市計画、まちづくり、観光まちづくり

キーワード：地域資源　一斉公開　ロンドン　オープンシティ　都市

１．研究開始当初の背景

近年､歴史的市街地での取り組みをはじめ、観光の力を活用した地域資源マネジメントの実践や手法の理論化が試みられている。観光まちづくりの基本理念が定着し､｢全国総観光地｣時代とも言える現代において、その実践段階として、地域が観光や交流を前提とした資源発掘、価値付け、管理、活用に取り組む地域資源マネジメントがますます重要になっている。

前研究課題［市民参画型シティプロモーションとしての建築公開行事｢オープンハウス｣に関する研究，科研費基盤研究(C), 2012-2015, 課題番号 24611012］では、都市や地域単位で期間を限定し、建築物を一斉公開するイベント｢オープンハウス｣に着目し、これが建築を通じた地域教育、シビックプライドの醸成、建築物の保全活用の基盤づくりに貢献している状況を明らかにした。本研究課題では、公開対象となる資源を庭、工場、スタジオ、歴史遺産等へと拡げ、これらの取り組みを「オープンシティ・プログラム（地域資源一斉公開プログラム）」と総称し、これが地域資源マネジメントに資する有効な手段になり得るのではないかと考えた。

他方、都市の公共性や社会性に対する関心が高まり、様々な人を受け止める寛容さ、活発な交易や交流を可能とする自由さ、時代のニーズに合わせて変容していく柔軟さなど、本来都市に備わっていた場所や機能を取り戻そうと、改めて都市を「ひらく」ための取り組みが近年各地で試行されている。道路や広場などの公共空間を有効活用するための社会実験、私的空間を宿泊施設やオフィスとしてシェア（共有）する取り組み、建築物や土木インフラなどの建設プロセスやその価値に関する情報発信など、物的空間、人々の意識・ふるまい、情報など「ひらく」対象は多様である。

本研究課題が注目する「オープンシティ・プログラム」が、この都市を「ひらく」取り組みに向けた実験的、仮設的、広告宣伝的な役割を果たし、都市の将来ビジョン実現に向けた手段として、活用できるのではないかと考えた。

２．研究の目的

（１）「オープンシティ・プログラム」の全体像の把握

現在国内外で実施されている「オープンシティ・プログラム」のバリエーション（対象資源のひろがり／プログラムの目的や内容の多様性／参画主体等）を把握する。また、観光振興、文化財保護、まちづくり、産業振興等の各種政策や事業のなかで用いられてきた「一斉公開」という手法について、現代の都市づくりのなかでの位置づけや期待を明らかにする。

（２）「オープンシティ・プログラム」の理念・企画運営手法の解明

事例調査を踏まえて、「オープンシティ・プログラム」の構想、体制づくり、イベント企画、当日運営等に関する方法を俯瞰的に整理する。

３．研究の方法

（１）「オープンシティ・プログラム」の動向把握調査

我が国での実施状況を全国の地方自治体や観光協会へのアンケート調査（2015 年 4 月実施）や主要新聞紙上での報道記事から網羅的に抽出し、さらには既知の事例を追加し、リスト化を行った。この作業を踏まえて、公開対象となる資源特性や種類、開催規模、時期・期間などの全体的傾向を把握した。

（２）「オープンシティ・プログラム」の事例調査

上記のリストから、国内外の先進的事例、模範的事例を抽出し、イベント時の観察調査や主催者へヒアリング調査等の事例調査を積み重ね、帰納的に「オープンシティ・プログラム」に共通する理念や方法論を導き出した。

なかでも先駆的事例である「オープンハウス・ロンドン」に関しては、創始者であるヴィクトリア・ソーントン氏を日本へ招聘し、その理念・哲学をひろく共有した。

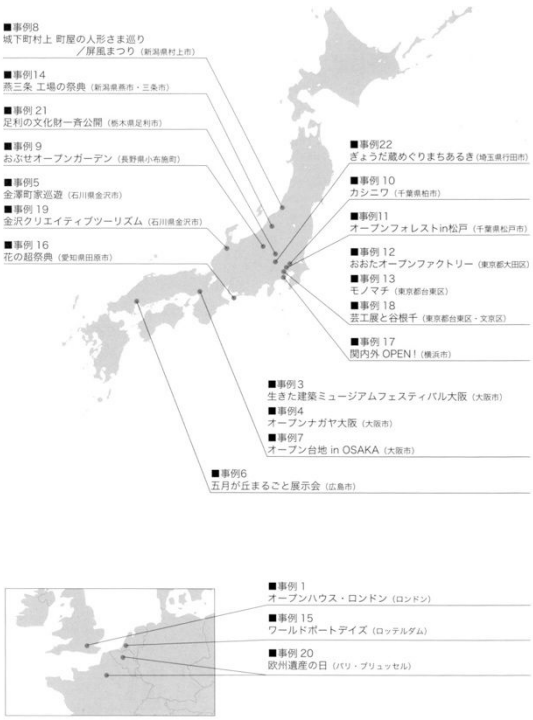

図１　研究対象事例の位置（出典：「まちをひらく技術」p.82）

４．研究成果

（１）シンポジウムの開催

2016 年 11 月に、英国ロンドンにおいて建築物一斉公開プログラム「オープンハウス・ロンドン」の企画運営を 1992 年以来 25 年にわたりリードしてきたヴィクトリア・ソーン

トン氏を招聘し、連続シンポジウム「オープンシティ・シンポジウム」を東京、横浜にて主催した（首都大学東京、横浜国立大学との共催）。

ソーントン氏からは、以下の内容の基調講演を頂いた。「オープンハウス・ロンドン」は、市民と建築の距離を縮め、ひいては市民が都市へとかかわるきっかけづくりを目指し、「体験」「対話」「エンパワメント」「アドボカシー」の４つの段階的プロセスを意識してきた。また、財源確保やボランティア育成は重要な課題である。とくに近年は、世界展開「オープンハウス・ワールドワイド」（世界 30 数都市で実施）や、オープンハウスの効果分析「インパクトスタディ」を重視している。

さらに、オープンハウスに関する有識者や実務者も交えて、多角的な議論を行った。

①東京：東京はロンドンから何を学べるか
パネリスト:：伊藤香織（東京理科大学）／倉方俊輔（大阪市立大学）
②横浜：オープンハウス・ロンドンに学ぶまちの「開き方」～オープンシティ・横浜を 目指して～
パネリスト：曽我部昌史（神奈川大学・みかんぐみ）／小田嶋鉄朗（横浜市都市整備局都市デザイン室）／熊谷玄 （スタジオゲンクマガイ）

なお、ソーントン氏は日本滞在中、我が国で実施されている類似プログラムとして、芸工展（台東区他）、関内外 OPEN!（横浜市）、生きた建築フェスティバルミュージアム大阪（大阪）の現地視察も行った。

図２ シンポジウム（2016 年 11 月開催）のチラシ

（２）図書の刊行

研究成果を取りまとめて、図書「まちをひらく技術 ―建物・暮らし・なりわい― 地域資源の一斉公開」（オープンシティ研究会・岡村祐・野原卓・田中暁子著,学芸出版社，2017 年 9 月）として刊行した。本書の内容を概観することで、本研究課題の結論に替えたい。

本書は、２部構成となっており、第１部理論編の第 1 章で現代社会において、なぜ都市を「ひらく」ことが求められているのか、公共空間活用、エリアマネジメント、シビックプライドの近年の潮流に加えて、歴史的な文脈も含めて論述した。

第 2 章では、「オープンシティ・プログラム」の基本的な情報を整理し、我が国におけるひろがりを示した。まず、「オープンシティ・プログラム」の基本要件として、以下の４点に整理した。

１）特定のテーマにもとづいたプライベートな資源（普段は特定の人々によって独占的に利用されている資源）を対象とする
２）社会的、文化的、地形的まとまりのある一定範囲の地域で実施する
３）顕著な資源のみに依存するのではなく、同質の性格を有する複数資源を一斉公開する
４）時間・期間限定で公開する

次に、全国での実施状況として、50 以上の事例を抽出し、資源特性としては、現代の生活や生業等の営みに立脚したものから歴史遺産まで多様性に富み、代表的なものとしては、庭（オープンガーデン）、スタジオ（オープンスタジオ）、工場（オープンファクトリー）、歴史遺産（オープンヘリテイジ）等が挙げられる。また、資源のプライベート性という点からは、１）生活資源、２）なりわい資源、３）貴重資源、４）潜在資源の４つに分類されることを示した。

表１ 「オープンシティ・プログラム」の対象資源の分類（出典：「まちをひらく技術」p.35）

①現代の生活や生業等の営みに立脚したもの	建築内部		建築全般	
			用途	住宅、業務、工場、アトリエ・スタジオ等
			様式	町家、町屋、一戸建て等
	中間		ビニルハウス（温室）	
	外部環境		庭、森等	
②過去のある時点で個人、地域、国家に対して重要な役割を果たしていたもの	時代		古代～近世	古墳、古社寺、古民家、蔵等
			近代～現代	近代化遺産、町家・長屋、蔵等
	種別	不動産	建造物	古民家、蔵
			史跡	古墳、近代化遺産等
		動産	美術工芸品	仏像、古文書等
				家宝（雛人形・屏風）

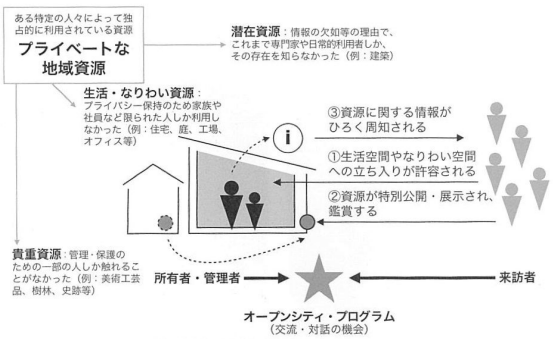

図３ 「オープンシティ・プログラム」の対象資源へのアクセス（出典：「まちをひらく技術」p.38）

第 3 章では、「オープンシティ・プログラム」の理念や企画運営方法が、いかに都市「ひらく」取り組みへとつながっていくのか、そのエッセンスを取り出し、１）ストックマネジメントの視点、２）コミュニティ形成の視点、３）地域ブランディングの視点、４）地域連携の視点が「オープンシティ・プログラム」には内在していることを明らかにした。

第 4 章では、各地の「オープンシティ・プログラム」の取り組みからみえてくる企画運営のハウツーを以下の 18 の段階にまとめた。

【構想】
① 「オープンシティ・プログラム」への期待を共有する
② 公開対象となる資源を決める
③ 先行事例を参照する

【体制づくり】
④ 企画運営のためのチームをつくる
⑤ 予算を確保する
⑥ イベントの開催エリアを決める
⑦ ボランティアを集め、教育する

【イベント企画】
⑧ 公開する資源を決める
⑨ 拠点となる場所を設定する
⑩ 来訪者の回遊性向上を促進する
⑪ 地図・ガイドブックを制作する
⑫ イベント当日に向けて盛り上げていく

【当日運営】
⑬ 公開資源やまちなかを演出する
⑭ 公開資源で来訪者をもてなす
⑮ 来訪者が偏らないようにする
⑯ イベントを記録する

【レビュー】
⑰ 交流会を開催する
⑱ 事後評価をする

そして、第Ⅱ部の事例編では、事例調査を行った国内外の 22 事例（図１）を、６つのカテゴリー（建築、暮らし、庭、なりわい、クリエイティビティ、レガシー）に分けイベントの内容や企画運営を詳述した。

（３）オープンファクトリーの実践

研究代表者の岡村および分担者の野原は、東京都大田区において、町工場の一斉公開イベント「おおたオープンファクトリー（第 5 回～７回）」に携わり実践的研究を進めた。企画運営者としての立場は、「オープンシティ・プログラム」の方法論構築に対して、有益な知見を提供した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 岡村祐・豊田純子・野原卓・川原晋（2016）：我が国における工場一斉公開プログラム「オープンファクトリー」の開催動向と可能性，日本都市計画学会論文集, 51-3, pp.619-626，査読有 https://doi.org/10.11361/journalcpij.51.6 19

② Taku Nohara, Yu Okamura & Susumu Kawahara (2016): Research for a Comprehensive and Active Planning Method in an Industrial-Residential Mixed Area- Focused on Ota Creative Town Vision in Ota Ward, Planning Malaysia Journal Special Issue IV-2016, pp.369-382，査読有 http://dx.doi.org/10.21837/pmjournal.v14.i4.171

③ 岡村祐・野原卓・田中暁子（2015）：建物一斉公開プログラム「オープンハウス」の地域資源マネジメントにおける教育・啓発手段としての可能性，日本建築学会技術報告集, No.49, pp.1241-1246，査読有 https://doi.org/10.3130/aijt.21.1241

〔学会発表〕（計 3 件）

① Y. Okamura, T. Nohara and A. Tanaka (2017): Resource characteristics of architecture in Open House initiatives. Proceedings of the International Conference on “Changing Cities”, Syros, Greece, Jun. 2017.

② Yu Okamura, Junko Toyota, Susumu Kawahara and Taku Nohara (2015): Characteristics of the Open Factory in Terms of a Local Revitalisation Scheme-A Case Study on Ota Ward, Tokyo-, 13th International Congress of Asian Planning Schools Association (APSA), Universiti Teknologi Malaysia, 2015.08

③ Taku Nohara, Yu Okamura, and Susumu Kawahara (2015): Research for a comprehensive and active planning method in an industrial-residential mixed area -focused on Ota Creative Town Vision in Ota Ward, Tokyo-, APSA201513th International Congress of Asian Planning Schools Association (APSA), Universiti Teknologi Malaysia, 2015.08

〔図書〕（計１件）

① オープンシティ研究会・岡村祐・野原卓・田中暁子著：『まちをひらく技術 ―建物・暮らし・なりわい― 地域資源の一斉公開』，学芸出版社，2017 年 9 月

〔シンポジウム〕

① 「オープンシティ・シンポジウム」，横浜国立大学主催・首都大学東京共催，オープンシティ研究会企画，YCC ヨコハマ創造都市センター 3 階，2016 年 11 月 4 日

② 「オープンシティ・シンポジウム」，首都大学東京主催・横浜国立大学共催，オープンシティ研究会企画，東京大学福武ホール，2016 年 11 月 2 日

〔その他〕
Facebook ページ
https://www.facebook.com/opencity.JAPAN/

６．研究組織

（１）研究代表者

岡村　祐（OKAMURA Yu）
首都大学東京・都市環境科学研究科観光科学域・准教授
研究者番号：60535433

（2）研究分担者

野原　卓（NOHARA Taku）
横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授
研究者番号：10361528

田中　暁子（TANAKA Akiko）
公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所・主任研究員
研究者番号：70559814